

同一家族内における生まれ変わり型事例

大 門 正 幸* (中部大学全学共通教育部／バージニア大学医学部)

A Same-Family Case of the Reincarnation Type

Masayuki OHKADO (Chubu University, University of Virginia)

Up until the Second World War, the idea of reincarnation was a quite prevalent concept in Japan, and it was widely believed that the dead would return to the same family they belonged to. Correspondingly, there appear to have been many cases of the reincarnation type (CORTs) within the same family. Such same family CORTs are by no means obsolete in contemporary Japan, and in this article I would like to report a case in which a dead daughter, who passed away in 2004 at the age of 6, appears to have been reborn in 2009 as her brother in the same family. At the time of the investigation the child was 5 years old. The case involves apparent after death communication (ADC) and announcing dreams. Although the child in this case did not claim that he was his sister reborn, he made some striking remarks suggesting that he did have memories as his departed sister. He also played in such a conspicuous way as to remind her mother of the way her daughter played while she was alive. The present case would be analyzed in terms of the Strength-of-Case Scale (SOCS), and some of its notable characteristics would be compared with those of other cases investigated at the University of Virginia and incorporated as part of the CORT database being developed there.

Keywords : parapsychology, case of the reincarnation type (CORT), same-family case, sex-change case, Strength-of-Case Scale (SOCS)

I. はじめに

日本人にとって生まれ変わりという概念がずっとなじみ深かった第二次世界大戦前には、死者が同じ家族の元に生まれ変わってくるという考え方はかなり広く受け入れられており、いくつもの生まれ変わり型事例 (Cases of

the Reincarnation Type, CORTs) が存在していたようである¹⁾。

現代の日本でもこのような事例は存在し、筆者自身もそのいくつかを調査している (未発表)。本稿では、その中の一つである男児の事例を紹介したい。また、その事例に見られるいくつかの要素が、バージニア大学知覚研究所の

*〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200
中部大学全学共通教育部
Tel. 0568-51-1111 Fax. 0568-51-1141
e-mail: ohkado@isc.chubu.ac.jp

生まれ変わり型事例データベースにおいてどれぐらいの割合で見られるものなのかについて分析を行い、生まれ変わり型事例全体の中での本事例の特徴を浮き彫りにしたい。

なお、過去生記憶の位置づけについては、いわゆる「超サイ VS. 死後存続論争」が示すように^{2),5)}、超心理学者の間においてさえ同意が得られていないのが現状であるため、本稿では記憶の真実性については中立的・記述的な立場を取ることにする。

II. 調査対象と調査方法

調査対象者は、2009年7月生まれで首都圏在住の男児、かのん君【注】である。母親の職業は看護師。2013年11月からメール・SNSを通して母親とやり取りをした後、2015年5月に本人および両親と面談を行った。また面談後の2015年6月に母親の友人に電話で聞き取り調査を行った。その後もSNSでのやり取りを通して、情報の確認や補足を行っている。

III. 過去生の人物について

過去生の人物であると考えられるのは、かのん君の異父姉にあたる桃華ちゃんである。

桃華ちゃんは、1997年5月、2歳年上の姉リカちゃん(仮名)の妹として誕生した。女の子らしく、アクセサリー作りや小さなフィギュアが大好きで、よく姉のリカちゃんとフィギュアやぬいぐるみを使った「ごっこ遊び」をしていた。中でも、シルバニアファミリーのウサギのフィギュアを使い、姉に特定のウサギの役をさせ、映画監督のように台詞まで指定して遊びに興じる姿が印象的だったという。好きな色は名前と通じる場所のあるピンク色(桃色)で、筆者が見せていただいた桃華ちゃんの写真の大部分はピンク色の衣服を着用していた。ピンク色は女の子が好む一般的な色ではあるが、後述する、かのん君の振る舞いと関係する重要な点のひとつであるので、ここで記しておく。また、絵本も大好きで、毎晩数冊の本を読み聞かせてもらっていたとのことである。

大変健康な幼児期を過ごしていたが、3歳の

時に小児がんを発病し入院、2年ほど、手術や化学療法を繰り返す。長い治療が終了した後、退院前検査をしたところ、治療による副作用の二次性急性骨髄性白血病を発症していることが判明。幸いドナーが見つかり骨髄移植を行ったものの、6歳になる頃に再発。病院でのこれ以上の治療に意味を見出せなくなった母親は自宅での看取りを決意し、2003年の春、医師を説得して桃華ちゃんを帰宅させた。

病院から自宅に帰る車中、母親は桃華ちゃんと大変印象的な会話を交わしている。母親と医師とのやり取りは知らないはずの桃華ちゃんが「雪の国に帰らなくちゃいけないの」と言い出す。動揺した母親が「雪の国に帰るなんて、なんだかかぐや姫みたいだけど、ママが帰らないでっていったらどうなるの?」と聞くと「なんで遅くなったんだって怒られちゃう。でもね、ママに手紙を書くから、『元気ですか? さみしくないですか?』って手紙を書くから」との言葉が帰ってきた。

家で看取る覚悟での帰宅だったものの状態はよくなり、幼稚園の運動会にも車椅子で参加できるほどであった。しかし、夏が過ぎ、秋も深まるに連れて、容態が悪くなり、2004年1月、6歳と8カ月の時、母親に抱かれながら息を引き取った。

その次の朝、辺りがうっすらと雪に包まれているのを見て、母親は「雪の国に帰る」と言ったのは、雪の降る時期ということだったのかな、と感じたとのことである。

IV. 意識の死後存続を思わせる現象

意識の死後存続を示唆する現象は数多く報告されているが⁶⁾、桃華ちゃんの他界後にもそのような出来事が起こっている。

母親によれば、葬儀が終わって数日した頃、桃華ちゃんの姉のリカちゃんと二人で居間にいたところ、突然電気が消えるということがあった。調べてみると電気を使い過ぎたわけでもないのに、居間だけブレーカーが落ちており、二人は「きっと桃華ちゃんがやったんだね」と話したそうである。死者が電気を消すなどして生

者と交信を取ろうとするという話は、故人に関する正確な情報を入手できることが実験において確認されているという意味において信頼できる霊媒も報告しているところであり⁷⁾、その点で重要な出来事であると言える。

また、桃華ちゃんの通っていた幼稚園の卒園式では、園の計らいで卒園生として他界後の桃華ちゃんの名前も呼ばれたが、母親によれば子ども達の中には桃華ちゃんの姿が見えると発言したのも数名いた。さらに、卒園式の様子は地元のテレビで放映されたが、その映像では桃華ちゃんの名前が呼ばれた後、それに答えるかのようにノイズが入っている。このノイズについては、卒園時には誰も気づかなかったとのことである。筆者自身もこの番組の録画映像を視聴し、音調的には「高高」のアクセントで「はい」と答えているかのようなノイズが入っていることを確認している。なお、このノイズが放送時から入っていたものなのか、録画の時点が入ったものなのかについては不明である。

さらに、桃華ちゃんの他界後、4、5年経った夏、桃華ちゃんと同時期に入院していた男の子みっくん（幼少時の呼び名）とその母親が印象的な体験をしている。なお、みっくんの母親は桃華ちゃんの母親の友人である。

みっくんが入院していたのはゼロ歳の時で、赤ん坊好きの桃華ちゃんをよく「みっくん、みっくん」と話しかけていた。しかし、桃華ちゃんの他界した年の4月に退院したみっくんに対して、母親は桃華ちゃんの話をしなかったため、みっくん自身は桃華ちゃんのこととは全く覚えていなかった。みっくんが4歳か5歳の時の夏休みのある夜、みっくんが突然母親に対して「玄関からだれか来た」と言った。訪問客が来た様子もなく、姿も見えないため驚いた母親が「誰」と尋ねると「桃華ちゃん。『みっくん、遊びに来たよ』と言ってる」との返事。さらにみっくんが「誰かもう一人一緒にいる」と言うので、母親が「名前を訊いてみて」と提案したところ、もう一人の子に対して尋ねる様子を見せた後、みっくんが「訊いても答えてくれない」と返答。そこで母親が「じゃあ桃華ちゃんに訊

いてみて」と促すと「ゆみちゃん（仮名）って言ってる」との返事が帰ってきた。「ゆみちゃん」は桃華ちゃん同様、長期に渡って入院しており、桃華ちゃんより半年以上前に亡くなった女の子の名前で、幼いためまだ話ができなかったゆみちゃんは、優しい言葉をかけてくれる桃華ちゃんをととてもよく慕っていた。しばらくして二人は仲良く玄関から帰っていったとのことである。みっくんとゆみちゃんは半年程同室で入院していたが、幼かったみっくんはゆみちゃんのことを記憶していなかったし、みっくんの母親もゆみちゃんのことについては話をしていなかった。

みっくんの母親にとっては、本人が記憶しているはずのない桃華ちゃんのことや、ゆみちゃんのことをみっくんが語ったのは大変な驚きであり、筆者が聞き取りを行った時点でもこの時の出来事はよく覚えているとのことであった。

V. 予告夢

生まれ変わり型事例の多くにおいて、過去生の人物が生まれ変わって来ることを示唆する、いわゆる予告夢が見られる⁸⁾。今回の事例においても、両親がそのような夢を見ている。

桃華ちゃんが他界する直前の2003年、母親は、父親と別の道を歩むことを決意し、長女のリカちゃんと3人での生活を始めた。この時35歳になっていた母親は、新たに子どもを儲けることなど全く考えていなかった。しかし、その後、現在の夫と出会い再婚、そして2008年の11月、不思議な夢を見た。日本のバンドMr. Childrenが知らない曲を演奏する内容だったが、メロディー・歌詞のいずれもが非常に素晴らしかった点が強く印象に残る夢であったという。この夢を見た数日後の11月20日、母親がテレビを点けたところ、TBSの音楽バラエティー番組『うたばん』が放送されていて、ちょうどMr. Childrenが10月にリリースしたばかりの「花の匂い」という曲を演奏するところであった。歌詞には「“永遠のさよなら”をしても／あなたの呼吸が私には聞こえてる／別の姿で同じ微笑みで／あなたはきっとまた会いに来てくれる」

とか「本当のさよなら」をしても／温かい呼吸が私には聞こえてる／別の姿で同じ眼差しで／あなたはきっとまた会いに来てくれる」といった生まれ変わりを示唆する一節が含まれている。また、曲の題名「花の匂い」の「花」も桃華ちゃんの名前の「華」に通じるようで、母親はこの歌が桃華ちゃんからのメッセージであるかのように感じた。そしてその11日後に妊娠していることが判明した。

妊娠が分かってから父親の方も繰り返し印象的な夢を見ている。森の中、二人の小さな女の子がとても楽しそうに笑っているという内容で、姿がはっきり見えたわけではないが、父親は、桃華ちゃんとゆみちゃんからのメッセージではないかと感じたとのことである。

このような出来事から、生まれて来る子どもに対して、両親は「再生」の意味を込め、パッヘルベルの楽曲にちなんで「カノン」と命名した（「カノン」は同じ旋律が異なる時点から繰り返される音楽形式）。

VI. 容貌・好み・振る舞い・発言

過去生記憶を持つ人物の容貌や体躯が過去生の人物と酷似している事例が多数存在している。そのような事例を、生まれ変わり型事例研究の第一人者であるIan Stevenson博士は、写真を添えていくつも紹介している⁹⁾。このような事例に見られる場合と同じように、かのん君の容貌も桃華ちゃんの容貌と大変よく似ている。二枚の顔写真の類似度を数字で表してくれるマイクロソフトのサービスTwinsOrNot¹⁰⁾で5歳のかのん君の容貌と桃華ちゃんの容貌の類似度を調べたところ、数値は82%で“Wow, you two are twins!”と判定された。分析に使用したのは無帽の正面写真で、解像度および大きさは151dpi、約600×700ピクセルである。比較のために同程度の解像度および大きさの5才男児の写真と桃華ちゃんの写真の類似度を調べたところ、得られた数値は44%、62%、67%、71%、79%で評価は“Exceedingly average”、“besties”、“Above average”、“A dynamic duo”、“I see the resemblance!”であった。桃華

ちゃんとの類似という観点から見た場合、筆者の判断では概ねこの数値は妥当であるように思われた。もちろんTwinsOrNotは実験的サイトでありアルゴリズムも不明のためあくまで参考的数値に過ぎないが、それでも二人の容貌が似ているということはある程度の客観性を持って言えるであろう。母親が同じなので当然遺伝的な要因は大きいと思われるが、母親によれば、しゃべり方やしぐさ、歩き方、声などあまりにそっくりで驚かされることが多いとのことである。

かのん君が2歳になったばかりの時、「遠くからママのお腹にやってきた」、「早く早くって、やってきた」と語った。いわゆる中間生記憶である。母親は、かのん君が誕生した時41歳になっていたため、この発言は自分の年齢を気づかって急いでやってきてくれたという意味だと解釈している。

中間生記憶については、2015年の秋（6歳）にも話をしている。母親と二人でベッドに寝転んで窓の空を見ていた時、「きれだね～、気持ちいいね～」という母親の言葉に対して、かのん君は「空の上には天国があるのかな～・・・夢なのか本当なのか想像なのかわからないけれど、天国にはきれいな花が咲いていて、キラキラした川が流れていて、花も川もこっちの世界にはないくらい奇麗なんだよ。川はピンクとオレンジの様な色で、かのんくらいの大きさの小さな天使が飛んでるんだよ。男の天使もいるよ」と語った。また、「天国の神様は座布団のような物に座っていて、神様の前にお面がいくつもあって、どのお面にするか自分で選ぶんだよ。（ひょっとこのような顔をして）中にはこんなお面もあるんだよ。それで、選んだお面をつけるとかのんの顔になったんだよ」とも話した。その時は、既に天国について色々な話を聴いているので、その影響ではないか、と母親は考えた。しかし、同年の12月19日の夜、入浴中に母親に対して「かのんが前話した天国はどんなところだったでしょう」と質問した。母親が、「天国にはきれいな花が咲いていて～」とかのん君が秋に話した天国の様子のお話を繰り返すと「他

にもあったでしょ」と言い、自分で顔を選んだ話を繰り返した。母親にとっては、まるで「本当の話だから、信じてね」と念を押されたかのようにであったと言う。なお、2016年1月に天国について母親が確認したところ「川みたいな海みたいなのがあって、水がキラキラして綺麗」と答えたとのことである。

桃華ちゃんと同じように、かのん君も花が大好きで、1歳の頃には花を見るとよく「きれ〜い！」と感嘆の声を上げていた。

また、桃華ちゃんと同様にピンク色が大好きで、自分が選ぶ服は全てピンク色であった。

さらに、次の逸話も印象的である。かのん君の通う幼稚園では、成長の記録として誕生日に手形を押す。手形の色は「青」と「ピンク色」から選べ、通常男の子は「青」を、女の子は「ピンク色」を選ぶが、3歳の時も4歳の時もかのん君が選んだ色はピンクであった。

キョウリュウジャーやウルトラマンなども好きだが、女の子用の小物やアクセサリも大好きで、リップや櫛、髪留め等を入れたピンク色のおしゃれセットを持っていた。ピンク色の服を着たかのん君の写真や髪留めをしてもらってご機嫌なかのん君の写真はたくさん残されており、筆者もそれを確認している。

また、桃華ちゃんと同じようにシルバニアファミリーのウサギのフィギュアが大好きで自分のシルバニアファミリーセットを持っている(桃華ちゃんのものは葬儀の時に納棺)。また、フィギュアを使って異父姉のリカちゃんと遊ぶ(遊んでもらう)時の様子が桃華ちゃんにそっくりだったと言う。すなわち、桃華ちゃんと同じように、あるウサギの役をリカちゃんに割り当て、指定した台詞をしゃべってもらって「ごっこ遊び」をしていたとのことである。なお、面談時に父親は、デパートに言くと父親の手を引いておもちゃ売り場に連れていき、シルバニアファミリーのフィギュアをねだることがある、と語っていた。

文章の読解に関してかのん君は大変早熟で、面談の時点(5歳)での愛読書のひとつは『エルマーのぼうけん』であった¹¹⁾。主人公が9歳

の少年であり、一頁当たりの文字数が429字(33文字x13行、ただしイラストのみのページもある)、総頁数121ページという内容からも分かるように、通常は5歳の男児が自分で読む本ではない。出版社のホームページでは「読んであげるなら5・6才から、自分で読むなら小学低学年から」と書かれている¹²⁾。生まれ変わり型事例の当事者の多くが早熟さやどこで身に付けたか不思議に思われるような技能を見せるが、かのん君の読解能力もそのような例と考えられる。また後述のように、4歳である程度しっかりした文字が書けるようになっていた点も特筆に値する。

2013年11月(4歳4カ月)、「家の壁の色が違うね」と言い出したので詳しく話を訊いてみると、以前は色がずっと濃かったとのこと。実際、桃華ちゃんが住んでいた頃は新築したばかりで家の壁は濃い茶色をしていたが、現在は淡いベージュ色になっており、かのん君の語った通りであった。ちなみに、描画用ソフトGIMP(バージョン2.8.4、Mac版)を使って現在の壁の写真と桃華ちゃんが住んでいた頃の壁の写真の色を抽出したところ、シアン、マゼンダ、イエロー、ブラックの数値は前者がそれぞれ11、26、23、0、後者が69、76、54、24であり、その差は大変大きかった。写り方やどの部分を対象とするかによって数値は変動しうるが、一つの参考にはなるであろう。

また、2014年4月(4歳9カ月)には、感慨深げに「かのん、焼かれたことあるんだよね」と発言している。驚いた両親はその意味を追求しなかったが、火葬された時のことを語ったのではないかと解釈している。

その発言の2カ月ほど前にあたる2014年2月18日(2004年1月24日に桃華ちゃんが他界してから約10年後)、4歳6カ月になったかのん君が「ママに手紙書いたよー」と言って紙を持ってきた。そこにはギザギザの線が2本書かれていたただけだったので、母親が「なんて書いてくれたの」と尋ねたところ、「『ママ、さみしくないですか』って書いたんだよ」という返事が帰って来た。11年ほど前に病院から帰宅する車中で

桃華ちゃんを書くことを約束した手紙がこの時に届いた、そう確信させる出来事であった。しかもその数日前から珍しく大雪が続いていて、まさに「雪の国」から手紙が来たかのようなであった。

読み書き関して早熟なかのん君はこの時点で平仮名を全て書く事ができるようになっていたため、翌日の19日、母親が「昨日ママに書いてくれた手紙、せっかく字が書けるようになったんだから、もう一度書いてね」と言って書いてもらったのが図1である（「まま さみしくないですか さみしくないですか」と書かれています。1行目の「し」および1行目と3行目の「く」は鏡文字になっている）。

この手紙を書いてももらったとき、誘導しては行けないと考えた母親は、「さみしくないですかって書いてくれた手紙」ではなく「昨日ママに書いてくれた手紙」と言って書いてもらったとのことである。また、「さみしくないですか」の部分が2回続けて書いてある点について、一つは「元気ですか」の代わりではないか、つまり当初桃華ちゃんを書くと言っていた「元気ですか？ さみしくないですか？」という手紙を

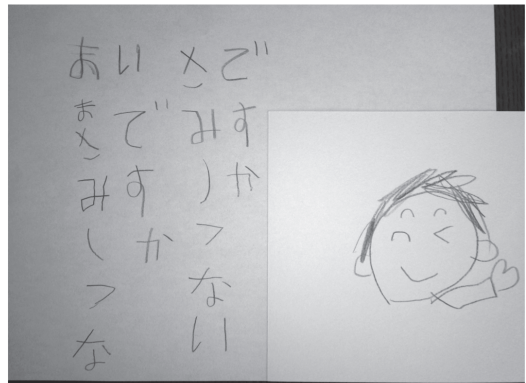


図1 かのん君が母親に向けて書いた手紙

書いてくれたのではないかと母親は考えている。

トリングットをはじめとする北米のネイティブ・アメリカンの間では生前に生まれ変わりを予言する場合が少なくない¹³⁾。生前、桃華ちゃんを書くと言っていた手紙は直接の表現ではないものの、一種の予言と解釈することも可能であろう。

前節と本節で述べた、本事例に関する特徴をまとめると表1ようになる。

表1 かのん君の事例に関するまとめ

I.	意識の死後存続を示唆する現象
	1. 居間の電気の消灯
	2. 卒園式での園児の発言
	3. 卒園式での呼びかけに答えるかのようなノイズ
	4. 桃華ちゃんと同時期に入院していたみっくんの体験
II.	生まれ変わりの予言(?) 手紙を書く
III.	予告夢
	1. 母親が見た、生まれ変わりを示唆するかのような楽曲に関する夢
	2. 父親が見た、桃華ちゃんとゆみちちゃんらしき子供達の夢
IV.	中間生記憶
	1. 「遠くからママのお腹にやってきた。『早く、早く』ってやって来た」という発言 (2歳)
	2. 「天国にはきれいな花が咲いていて、キラキラした川が流れていて～」という発言 (6歳)
	3. 「天国の神様は座布団のような物に座っていて、神様の前にお面がいくつもあって、どのお面にするか自分で選ぶんだよ」という発言 (6歳)
V.	過去生と関係する身体的特徴・振る舞い・発言など
	1. 容姿・声・仕種の類似
	2. 花が大好き

3. ピンク色が大好き（誕生日の手形の色の選択）
4. アクセサリー・小物・リップ・櫛・髪留め等が好き
5. フィギュア（シルバニア）を使った遊び方
6. 読解に関する早熟さ
7. 「家の壁の色が違う」という発言（4歳）
8. 「焼かれたことあるんだよね」という発言（4歳）
9. 「ママ、さみしくないですか」と書いた手紙（4歳）

VII. SOCSによる分析

ジム・タッカー博士は、子供が語る「過去生の記憶」の強さを測る尺度として、「母斑・先天性欠損」、「過去生に関する言及」、「振る

舞い」、「死亡人物との関連」という4つの範疇に分けられた22項目を含む、事例強度尺度（Strength-of-Case Scale, SOCS）を提案している¹⁴⁾。この尺度に従ってかんの君の事例を分析した結果が表2である。

表2 SOCSによるかんの君の事例の分析結果

項目	得点
母斑・先天性欠損	
1. 死亡人物の致命傷と一致	
医療記録による実証	0/8
死亡人物の友人または親族により実証	0/5
本人による主張のみ	0/2
2. 死亡人物の致命的ではない傷と一致	
医療記録による実証	0/5
死亡人物の友人または親族により実証	0/3
本人による主張のみ	0/1
3. 死亡人物の病気との一致	
医療記録による実証	0/4
死亡人物の友人または親族により実証	0/2
本人による主張のみ	0/1
過去世に関する言及	
4. 本人が過去世を記憶していると主張しているか	
している	0/0
しておらず、他の証拠にのみ基づいている	-2/-2
5. 過去生における場所や人々について語り、それらが過去生人格の死亡後変化している	5/5
6. 過去生に関する発言で実証されたものから誤りであったものを引いた数	
>20	0/8
11-20	0/5
6-10	0/3
1-5	1/1
0	0/0
-1(-5)	0/-2
-6(-10)	0/-5
< -10	0/-8
ふるまい	
7. 過去生と関係する、異常な食事上の好み・嫌悪	0/3
8. 過去生と関係する、異常な食事作法	0/3
9. 過去生と関係する、異常な嗜好品の好み	0/3
10. 過去生と関係する、異常な好み	3/3
11. 過去生と関係する、異常な技術や才能	3/3

12. 過去生と関係する、異常な敵意	0/3
13. 過去生と関係する、異常な恐怖症	0/3
14. 異なる性と関係する行動 (過去生の人格と性別が異なる場合)	
友人または血縁者による報告	3/3
本人と研究者のみによる報告	0/3
15. 過去生の家族または住居に戻りたい、または戻りたくないという欲求	
戻りたいという強い欲求	0/3
戻りたいという弱い欲求	0/1
中立的	0/0
戻りたくないという弱い欲求	0/1
戻りたくないという強い欲求	0/3
16. 遊びを通して表される、過去生での記憶	3/3
死亡人物との関係	
17. 死亡人物の特定	
学術的な素養のある調査者による	0/3
それ以外の調査者による	0/3
家族または友人による	1/1
18. 事例が明らかになるまでの二つの家族の関係	
緊密な関係、あるいは同一家族内	-2/-2
わずかな関係	0/-1
お互いを知ってはいたが無関係	0/0
お互いに全く知らなかった	0/5
19. 本人の生誕地と死亡人格の主な居住地 (km)	
0.0-1.5	0/0
1.6-24.9	0/2
25.0 以上	0/5
20. 本人と死亡人物との社会的地位の相違	
わずか	0/1
中程度	0/2
大きい	0/3
21. 本人と死亡人物との経済的地位の相違	
わずか	0/1
中程度	0/2
大きい	0/3
22. (カースト制に関するもののため割愛)	
合計点	15

※「得点」欄の2番目の数字は配点を、1番目の数字は「得点」を表す。たとえば「0/8」はその項目に該当する事実があった場合「8点」が与えられるが、そうではなかったので「0点」ということである。

VIII. データベースにおける数値との比較

50年に渡って世界各地から生まれ変わり型事例のデータを収集してきたバージニア大学知覚研究所では、これまでに収集された2,600を超える事例のデータベース化作業が進められている。このデータベースに収められるデータには、当事者の出生地、性別、家の宗教をはじめと

する200を超える項目が変数として設定されており、様々な調査を行うことが可能になっている。このデータベースを使い、今回の事例に特徴的な項目について見ていくことにしよう。なお、分析対象としたデータの総数は分析した時点(2015年1月)でデータベースへの入力終了していた2,030件であるが、全てのデータにおいて全ての変数の値が入力されている訳では

ないので、総数は項目毎にバラツキが見られる。

まず、過去生の人物と当事者の性別の対応に関するデータは表3のようになっている。

表3 過去生の人物と現在の人物の性別

男性 → 男性	1143 (59.9%)
女性 → 女性	590 (30.9%)
男性 → 女性	126 (6.6%)
女性 → 男性	50 (2.6%)
合計	1909

全体の約9割（ $1143+590/1909=90.8\%$ ）は過去生の人物と当事者の性が同じであり、両者の性別が異なる事例の割合は1割に満たない。さらに、かのん君の事例のように過去生の人物が女性で当事者が男性という事例の比率は2.6%と低い。ただし、過去生が女性であるという事例自体が全体の3割程度（ $640/1909=33.5\%$ ）であることを考慮し、過去生が男性の場合と過去生が女性の場合に分けて分析すると、性が変わった事例の比率は男性では約10%（ $126/[1143+126]=9.9\%$ ）、女性では約8%（ $50/[590+50]=7.8\%$ ）となり、その差はそれほど大きくない。

性の転換以外でかのん君の事例に特徴的な、同一家族事例、生まれ変わりの予言および予告夢の含まれる事例、容貌の類似した事例、異性的な嗜好を含む事例、通常ではない技能（かのん君の場合、読解能力）を示す事例、過去生と関係する遊びを示す事例、葬儀等の記憶を持つ事例に関する数値を表4に示した。

表4 かのん君の事例に特徴的な項目（「性の転換」を除く）

同一家族事例	498/1622 (30.7%)
生まれ変わりの予言	60/1155 (5.2%)
予告夢あり	667/1511 (44.1%)
容貌の類似	301/532 (56.6%)
異性的嗜好	126/540 (23.3%)
通常ではない技能	370/722 (51.2%)
過去生と関係する遊び	343/703 (48.8%)
葬儀等の記憶	179/721 (24.8%)

表4に示すように、かのん君の事例に特徴的な項目がデータベース内のデータで見られる頻度は、本事例においては判断が難しい「生まれ変わりの予言」を除けば、23.3%～56.6%であり、かのん君の事例には他の事例と多くの共通点があることが分かる。

SOCSについては、最小値が-4、最大値が49、平均が9.6、中央値が7.0、標準偏差が8.8であった。前節で示したように、かのん君の事例は15点であり、平均よりやや高い事例であるということになる。

Ⅹ. 結語

日常生活での情報のやり取りによって事例が形成される可能性があるため、同一家族事例の分析には特に慎重になる必要がある。しかし今回紹介したような事例は、その全体的な特徴から、生まれ変わり型事例の一つとして分析されるべきである。現在の日本における生まれ変わり型事例の報告が非常に少ない現状において¹⁵⁾⁻¹⁷⁾、本稿で紹介したような同一家族内の事例も含め、さらに多くの事例を収集・分析していくことが急務であるように思う。

謝辞

本研究は、中部大学倫理審査委員会の承認を受けています（課題名：出生前記憶を語る子どもの実態に関する研究。承認番号：260100）。本稿の内容は、人体科学会第25回年次大会（2015年11月29日、於中央大学多摩キャンパス）での口頭発表に大幅な加筆修正を加えたものです。会場では、参加者の方々から貴重なコメントを頂戴しました。また、本事例の調査では、池川クリニックの池川明先生に大変お世話になりました。感謝申し上げます。さらに、本論文に対して大変貴重なコメント・助言を頂戴した本誌の2名の査読者に感謝いたします。そして何より、調査に全面的にご協力いただいた、かのん君とご両親、御友人に厚くお礼を申し上げます。

【注】

本事例においては名前が重要な意味を持つため、母親の了解を得て、当事者の名前については平仮名表記で（本名は漢字表記）、過去生の人物については実名で記す。

【文献】

- 1) 柳田国男：先祖の話, pp. 216-226, 角川学芸出版, 2013 (1946年版の復刻版).
- 2) Braude, Stephen E.: *Immortal Remains: The Evidence for Life After Death*, Rowman & Littlefield Publishers, 2003.
- 3) Keil, Jürgen: "Questions of the Reincarnation Type," *Journal of Scientific Exploration* 24 (1), pp. 75-94, 2010.
- 4) Nahm, Michael and Dieter Hassler: "Thoughts about Thought Bundles: A Commentary on Jürgen Keil's Paper 'Questions of the Reincarnation Type,'" *Journal of Scientific Exploration* 25(2), pp. 313-326, 2011.
- 5) Keil, Jürgen: "Reply to the Nahm and Hassler Commentary on Jürgen Keil's Paper 'Questions of the Reincarnation Type,'" *Journal of Scientific Exploration* 25(2), pp. 327-328, 2011.
- 6) Fontana, David: *Is There an Afterlife: A Comprehensive Review of the Evidence*, passim, Iff Books, 2015.
- 7) Schwartz, Gary E. with William L. Simon: *The Afterlife Experiments: Breakthrough Scientific Evidence of Life After Death*, Atria Books, p. 78, 2003.
- 8) Stevenson, Ian: *Children Who Remember Previous Lives: A Question of Reincarnation* (revised edition), McFarland, pp. 99-101, 2000.
- 9) Stevenson, Ian: *Reincarnation and Biology: A Contribution to the Etiology of Birthmarks and Birth Defects, Volume 2: Birth Defects*, Praeger, pp. 1867-1928, 1997.
- 10) TwinsOrNto.net, <https://www.twinsornot.net/>, 2016年3月3日接続.
- 11) ガネット、ルース・スタイルス さく／ガネット、ルース・クリスマン え／わたなべしげお やく：『エルマーのぼうけん』福音館、1963.
- 12) https://www.fukuinkan.co.jp/bookdetail.php?goods_id=831
- 13) Matlock, James. and Antonia Mills: A Trait Index to North American Indian and Inuit Reincarnation Beliefs. In: Mills, Antonia and Richard Slobodin (eds.) : *Amerindian Rebirth: Reincarnation Belief Among North American Indians and Inuit*, pp. 299-356, University of Toronto Press, 1994.
- 14) Tucker, Jim: "A Scale to Measure the Strength of Children's Claims of Previous Lives: Methodology and Initial Findings," *Journal of Scientific Exploration* 14(4), pp. 571-581, 2000.
- 15) 大門正幸：「『過去生の記憶』を持つ子供について—日本人児童の事例—」『人体科学』20(1), pp. 33-42, 2011.
- 16) 大門正幸：「『過去生記憶』を持つ子供—インド人としての記憶を持つ日本人女児の事例—」『人体科学』21(1), pp. 17-25, 2012.
- 17) Ohkado, Masayuki: "A Case of a Japanese Child with Past-Life Memories," *Journal of Scientific Exploration* 27(4), pp. 625-636, 2013.

〔受付 2016年2月8日〕

〔受理 2016年3月12日〕